

生涯教育研修活動報告書

生理・細胞・病理検査研究班

- 1 実施日時：2022年12月19日 18時00分～20時00分
- 2 会場：Web開催 教科・点数：専門教科－20点
- 3 主題：乳腺嚢胞性病変 ～超音波検査・細胞診・組織診からのアプローチ～
- 4 講師：式田 秀美（埼玉医科大学国際医療センター）
三瓶 祐也（独立行政法人地域医療機能推進機構 埼玉メディカルセンター）
津田 均（防衛医科大学校 病態病理学講座）
鶴岡 慎悟（独立行政法人地域医療機能推進機構 埼玉メディカルセンター）
- 5 協賛：なし
- 6 参加人数：会員195名 賛助会員0名 非会員0名 その他1名（津田医師）
- 7 出席した研究班班員：（生理検査）南雲涼太 工藤淳子
（細胞検査）鶴岡慎悟 急式政志 船津靖亮 野本伊織 猪山和美
稲山拓司 加藤智美 小川弘美 並木幸子
（病理検査）関口久男 森田繁 高橋俊介 小島朋子 細沼佑介
今村尚貴 遠山人成 松本祐弥 三鍋慎也

8 研修内容の概要・感想など

今回は生理、細胞、病理検査の3班合同研修会として、乳腺嚢胞性病変をテーマに開催した。

式田氏は、乳腺の解剖学的な構造と超音波画像との対比や、マンモグラフィーとの対比について、わかりやすく解説した。また、エラストグラフィー（組織弾性映像法）を用いることにより、腫瘍の硬さを調べることができ、良悪性鑑別の一助となることについても解説した。さらに、プローブの当て方による像の見え方の違いといった技術的な解説も行われ、細胞検査や病理検査に従事している者にとって非常に新鮮であった。

三瓶氏は、細胞診検査の流れ、細胞の見え方等の基本的事項から、良悪性の鑑別に至るまで講演した。嚢胞性病変における乳管内乳頭腫と非浸潤性乳管癌との鑑別が、非常に難しいことはよく知られているが、細胞像の特徴（核密度、細胞間の結合性の強さ、筋上皮細胞との二相性、血管間質の太さ等）を一つひとつ捉えていくことにより、より正確な推定が可能

になることを解説した。

津田医師は、嚢胞性部分と充実性部分を有する、混合性病変を中心に病理組織学的な講演を行った。免疫組織化学染色の情報が診断の一助となるとのことで、乳管内乳頭腫ではcytokeratin5/6 (CK5/6) 染色がモザイク状に陽性となり、p63 染色で筋上皮細胞との二相性（二層性）が確認できる。乳頭型非浸潤性乳管癌では、CK5/6 は染まらず、腫瘍辺縁部に筋上皮細胞（p63 陽性）が残存している。被包型乳頭癌では、腫瘍辺縁でも筋上皮細胞がみられず、浸潤癌へ進みつつあると、それぞれの疾患との鑑別のポイントを解説した。

鶴岡氏は、症例検討として良性と悪性症例の2例を提示した。実際の症例について、研修会で提示された鑑別のポイントを丁寧に観察していくことにより、判定につながれると感じた。

各々の部門で仕事をする検査技師にとって、超音波画像、細胞診、病理組織の情報を総合的に考えていくことは、検査精度を保つ上でもとても大切なことである。今回の研修会をきっかけに、他部門の検査情報にもアクセスする習慣を築いてほしいと考える。

提出日：2023年1月10日

文責：三鍋慎也